

里山を歩いていて大好きなもじずりの群生にあった。こんな所で待っていてくれたのかと一人で感激した。名前が示すように、細長い茎に桃色の小さな花を螺旋状にびっしりつけて伸びていく。茎の周りをくるくる回転しながら並んで上へ上へと登って行く。まさしく「捻じり花」なのである。

ある日、茎をまわりながら登って行くその捻じれ方に左巻き、右巻きがあるのに気がついた。その一群を観察していると、右巻きの方が左巻きより多かつたりまた、場所を変えて見ると左巻きの方が多かつたりとおもしろい。さらに楽しいのは茎の途中で右回りから左回りへ、あるいはその反対に向きを変えているのもあることだ。何とかわいい、まるで花自身に「意思」があるかのように途中で登る向きを変えていく。誰の指示でこんなことをと思わず微笑んでしまう。

草原に自生しているのだからと以前、一本失敬して庭に移植したことがある。いたずら心で持ち帰っても成功しない。公園の芝生や道路脇などで身近な所で見かけるのになぜ難しいのかと思っていたが、二年後、もじずりは見事に立ち上がってきた。その理由は、このもじずりが「ラン科」であることにもよるのではないかと思う。鞘が黄色くなった頃、種を採り、鉢に蒔いても発芽することはないようだ。こつがあった。採取した種を親株の株元に蒔けば成功するというのだ。だからこんなに群生するのだろうか。蘭の根元に、ある種の菌があつてそれが発芽を促すと聞いた。

手で一人楽しもうなんていじましい気持ちは捨てよう。こんな里山にごくごく普通に咲いていてくれるではないか。

陸奥のしのぶもじずり誰ゆえに乱れ染めにしわれならなくに 源 融

陸奥の国（福島県信夫郡）は、奈良、平安時代から乱れた模様のある石に、絹を当てて草の汁で染める「もじ擦り」が特産であった。

人を思う気持ちが「しのぶもじずり」「乱れ染めにし」と痛いまでこちらに届く。長い年月を経てもなお人の心を打つ。